

薄影

待ち人は来らず、曇天の下を面影が過ぎる

哀しみはなく、ただ空虚うつろというものの重みが
ゆっくりと、さらにさらにゆっくりと
私の首をうなだれさせてゆく

暗闇うちの中よりぼんやりと浮き上がるもの描かれ

胸の中より浮かび上がる、これは何者が
静かに、目の前に架かる絵画を見つめつつ

自分の中に投影うつされた何かを見つめる

街人の乱雑な流れの中に混じり
道のど真ん中に置かれた椅子に座りながら
なおもぼんやりと眺め続けるが
やはり未だその者の輪郭さえ明らかでない

コンサート・ホールの薄暗い中に座り
知らず知らず面影を捜し求める目が

ふとそれによく似た女ひとの姿をとらえるが
虚ろな心は呼びかけてみることも忘れてる

帰途、私は気がつきはじめていた
浮び出た、これは切ない愛であると
哀しみによく似ている、これは愛であると
そう、やはり私は「君が好き」と呟く

(1984.6.6)